

で文楽の世界に入り込むのは、なかなか難しい、できれば3回は劇場に観に来て頂きたいです。文楽の世界と感性が合う人なら、太夫・三味線・人形が一体となって織り成す文楽をきくと面白いと感じて頂けると思います。今は字幕がありますので難しい言葉も、字幕を読めば理解できます。でも人形の見せ場で字幕をみているお客さんが居ると『ここはこっちを観てよ〜』と思う時もありますよ(笑い)。



「菅原伝授手習鑑」寺子屋の段 武部源蔵

時間とお金を使って芝居を観に来てくださったお客様に人形の喜怒哀楽の感情がうまく表現でき喜んでもらうこと。それが伝わる芝居を目指しています。

一文楽の人形は、かしらと右手を操る「主遣い」左手を操る「左遣い」足を動かす「足遣い」の3人で1体を操る、人形遣いとは
「国立劇場(東京)や地方での公演で1年に100日以上はホテル住まいの生活です。人形遣いは肉体労働ですから、いつかは体がついていなくなり

ます。人形遣いが演者として一人前になるには足(足遣い)で10年、左(左遣い)で15年と言われる世界ですから50歳までは下積みです。そこから良い役が来たときに、それまでに自分が研鑽し、勉強してきたことをいかに発揮できるかが重要です。人形遣いとして1番いい時期は60~75歳くらいではないでしょうか。人形遣いはその為に30年の歳月を費やしています。」

一人形遣いとして大切なことは

「お客様に喜怒哀楽が伝わるような芝居を作らないといけません。会話劇ではないので、人形の身振りで言葉が伝わらないといけません。演じる上で、一応の型は踏み外しませんが、人によって表現の仕方は違います。今まで先人が演じてきたものを受け継ぎ、自分で考えた表現をすることでより良くなる事を目指して日々模索しています。人形を操る技術はもちろん大切ですが、演じる人物がその時何を考え、どう感じているのか等の感情を深く掘り下げることが重要です。そのためには芝居の本を読み込み勉強することが大事。公演ではお話の一部だけを演じることが多いのですが、実際の話は長いものと10時間以上に及びます。演じる部分だけでなく全体の話を読まないと、その時の人物の感情をうまく表現することはできません。人形を操るだけの技術ならそこまで時間はかからないと思います。お客様の評価が全てですから、人形遣いとしてお客様に納得してもらえる技術だけではない何かを込めることが大切です。時間とお金を使って芝居を観に来てくださったお客様に人形の喜怒哀楽の感情がうまく表現でき喜んでもらうこと。それが伝わる芝居を目指しています。お客様が『今日は面白かったな』と思い、帰ってもらうのが一番です。」

一立役(男性)から女方(女性)まで、数々の人形の喜怒哀楽を表現してきた吉田和生さんの左手は分厚く、薬指下の手のひらには大きな豆がある
「人形を遣う時、主遣いは左手のひらで胴串を固定して指先で操る(人形の顔の向きや動きを操作)ため手のひらに豆ができます。立役(男役)を多く

演じている時は、胴串を左手の中に入れて込んで大きく使うため、手のひらが分厚くなります。」



**300年以上続く伝統のある道に
いったん足を踏み入れた者は、先人に
習い教えられたことを次の世代に送る
義務が生じます。**

一文楽の世界に飛び込み50年、続けることの大切さとは

「もともとは、1人でコツコツやる仕事でしたが、3人で一つの人形を操り、太夫がいて三味線がないと始まらない文楽という正反対の仕事に就いてしまいました。ですが、300年以上続く伝統のある道にいったん足を踏み入れた者は、先人に習い教えられたことを次の世代に送る義務が生じます。私のところで、それを途絶えさせるわけにはいきません。意識する、しないに関わらずその義務を背負っています。ですから、私も弟子たちへは今すぐに分からなくても、5年後10年後に分かれば良いと思い、考え方や技術など全てにおいて気付いたことがあれば、その場で伝えるようにしています。」

一最後に1月3日から国立文楽劇場(大阪)で上演される「初春文楽公演」について

「正月らしく飾られた劇場のなか幕開きに万才(「花競四季寿」万才・鶯娘)もあり、大阪近辺が舞台となった馴染みがある話をもとにした文楽を代表する演目ばかりですので、楽しんでいただければと思います。」

文楽 ~三位一体で演じられる総合芸術~

文楽は、物語に節(ふし)をつけて聴かせる浄瑠璃に、三味線と人形操り(あやつり)が結びつき、1600年頃に生まれました。

文楽で演じられるお話は、世の無常や人の業、



悲しい恋や親子の別れなどを描いた、シリアスで複雑なものが多いですが、中には軽妙なユーモアが盛り込まれていたりする場面や、華やかな舞踊の演目もあります。

語り手を太夫(たゆう)と呼びます。三味線弾



きの演奏とともに、情景の描写や人物の言葉を一人で語り分けます。この義太夫節(ぎだゆうぶし)で語られる物語を、視覚的に表現するのが人形です。一体の人形を三人で遣うやり方で、美しく精妙な動きが生み出されます。

